

1997年に寮生としてインターナショナル・ハウスに入居した彼は、数多くの人とめぐり逢い、深い交流と実りある友情を育んでいきました。その活気に満ちた性格と人柄は周りの人々をたちまち魅了し、すぐに様々な国から来た仲間達と固い友情を築き上げていきました。殊に、先住民グリーンジとともに暮らすという、風変わりながらも積極的な姿勢は寮生達の興味をさらい、皆、彼の人生観、政治、経済に関する見解、そして旅の土産話に夢中で耳を傾けました。

インターナショナル・ハウスは、まさに彼の探求の旅のベースキャンプでした。ここから旅立ち、学び、そして戻ってきては旅の経験を分析し、書きとめ、また旅立つ。そして彼が久しぶりにインターナショナル・ハウスに舞い戻ってきたという知らせを聞けば、寮生達は土産話を聞きに彼の部屋へ訪ねました。またジャズが好きだった彼の部屋には、同じくジャズ好きの「常連」が何人か集っているというのが常でした。

忙しいながらも、寮生活にも積極的に貢献しました。寮対抗戦でバレーボールの選手として出場したのも、その一例です。また、一息入れようと休憩室に座っていても、いつの間にか歴史や政治のあり方といった奥深い会話をしてしまうほど、知的探究心が旺盛な人柄でした。こうして、寮生達との知的な会話と心の交流を日々楽しんでいたのです。

1999年、彼の指導教員がオーストラリア国立大学へ移籍することになり、彼女について彼も転籍しましたが、キャンペラで学業に励む間にも、しばしばシドニーへ戻り、インターナショナル・ハウスの友人達を訪ねました。そして2001年、ついに博士論文「Cross-Culturalizing History: Journey to the Gurindji Way of Historical Practice」を完成させるに至りました。

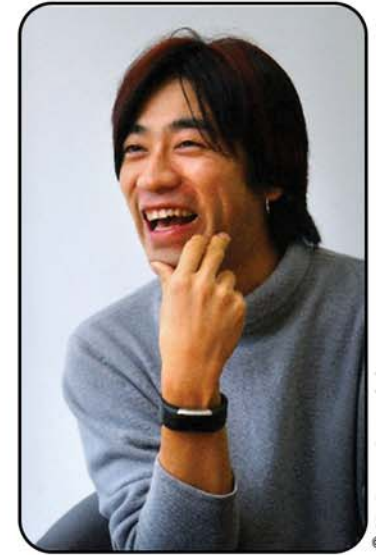
その後、彼は学術分野で活躍し始め、慶應義塾大学、一橋大学などの日本の著名大学や、オーストラリア国立大学、ニューサウスウェールズ大学などで教鞭をとりました。また、日本学術振興会特別研究員、オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所客員研究員、オーストラリア国立大学人文科学研究センター客員研究員でもありました。

そんな最中、2003年7月に彼は悪性リンパ腫（リンパ球のがん）を宣告されます。癌と闘った十ヶ月の間、彼は常に冷静さを失うことなく前向きで勇敢でした。しかし2004年5月10日、保莉実氏は32歳の若さでこの世を去ることになりました。

死後間もない2004年9月、彼が苦しい闘病生活の中で書き綴った初めての著作、「ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践」（御茶ノ水書房）が日本で出版されました。

誠実で情熱的、それでいて冒険心に溢れた一生。短い人生ではありましたが、無数の人々に感動を与えた大きな一生でもありました。彼は、インターナショナル・ハウスが目指す友情、異文化の理解、寛容さを、短くも深い人生をもって実践したのです。彼の生涯は、まさにインターナショナル・ハウスが長年理想として抱き続けてきた価値観を具現化したものなのです。

\* 保莉実氏の人生・業績については、ウェブサイト  
” Being Connected with HOKARI MINORU” (<http://www.hokariminoru.org>)をご参照ください。



© Photograph, Yomiuri newspaper